

私の宝物は、小学一年生の頃から使っているメモ帳です。

私の小学一年生の頃のおごずかいは一円十円でした。当時、私の小さな手の中でキラキラ光っていた百円玉、これは絶対に無くさないぞと心に誓いをたて、自宅からお店まで歩いた三十分。百円玉を握りしめた小さい私にとって、途方もなく長い時間だった事を今でもはっきりと覚えています。私はお店に着くと、汗ばんだ手の中にあつた百円玉を、お店のレジで、やっとメモ帳と交換したのでした。

私はメモ帳に、時折頭をよぎるマンガのネタや、新聞の備忘録、当時ほしかった商品の名前、転校していった友達のスイン等ジャンルを問わず、色々な事をメモとして残していきました。

そのメモ帳を、中学生になった今読み返してみると、何とも言い難い郷愁にかられるのです。小学生の頃のもとても楽しかった思い出や悲しかった思い出は、私の頭の中を走馬灯のようによぎります。それはまるで、映画を見ているかのような気持ちになるのです。

このメモ帳は、私と同じ時間を、私の年の数だけ共有してきました。メモ帳はまだまだ現役で、余白が沢山残っています。その余白には、ポケットに忍ばせていた頃に転倒して出来た泥染み、胸ポケットに入れてついた汗染み、お菓子を食べた後、手を洗わず触った時の油染みに、何時つけたか分からないお化粧染みまでついています。

余白のあちこちに出来たそれらのシミは、宝島へ行く為の地図のようにも見えます。また、所々にいつあいたか分からない穴は、秘宝が隠された洞窟、または、海賊と戦って出来た大砲痕のようにも思えてきてしまうのです。

何も考えず使っていた私の古いメモ帳は、今では大切な私の宝物になりました。